

近世後期江戸語における〈行く・来る〉の謙讓語

— 「うかがう」「あがる」「さんず」「まいる」 —

山田里奈

【キーワード】 近世後期江戸語、うかがう、あがる、さんず、まいる

1. はじめに

現代語では、〈行く・来る〉の謙讓語として、「伺う」や「参る」が使われている（菊地康人（1994・1997））。近世後期江戸語ではこれらの他に、「あがる」「参ず（る）」「まうづ」「まかる」が用いられていた（辻村敏樹（1968）の「敬語変遷一覧表（P. 378）」の「下位主体語」の「行ク（上位者ノ所ニ行ク）」の欄）。これらを『日本国語大辞典第二版』で引くと、「さんず（る）」は『枕草子』の例が、「まいる」は『徒然草』の例が初出例として挙げられており、古くから使用されていたことがわかる。反対に、「うかがう」と「あがる」の〈行く・来る〉の謙讓語の初出例は、「うかがう」が明治18年の『当世書生気質』（例1）、「あがる」が、江戸後期の『春色江戸紫』（例2）の例であり、比較的新しいことがわかる。

（例1）当世書生気質（1885-87）〈坪内逍遙〉一六「遠州からお帰京と聞たから、早速伺（ウカガ）はうと思ったがツイ」

（例2）人情本・春色江戸紫（1864-68頃）三・一三回「近日参上（アガッ）て伺ひませう」

ただし、「あがる」は現代語の〈行く・来る〉の謙讓語としては一般的ではなく、「うかがう」と「まいる」が一般的となっており、単純に新旧が入れ替わったとは捉えられない。そこで、本稿では、近世後期江戸語における〈行く・来る〉の謙讓語がどのように用いられていたのかを記述し、「うかがう」や「あがる」が当期に必要とされた要因について考察を行ないたい。

2. 先行研究による〈行く・来る〉の謙讓語の説明

2.1 〈行く・来る〉の謙讓語について

〈行く・来る〉の謙讓語である「うかがう」「あがる」「さんず」「まいる」について、湯沢幸吉郎（1954、1957）、田中章夫（1960）、辻村敏樹（1968）、小松寿雄（1971）、辻村敏樹（1992）により確認する。

まず、「うかがう」は、江戸語において〈訪問する〉の謙讓語として用いられたとするもの（田中（1960）、辻村（1968）、小松（1971））と、〈聞く〉や〈問う〉の謙讓語であるとするもの（湯沢（1954、1957））がある。次に、「あがる」は、辻村（1992）が「一般化したのは江戸時代以降」と述べている。この語も「うかがう」と同様、江戸時代以降に用いられた。最後に、「さんず」「まいる」は、辻村（1992）が同程度の謙讓語であると説明している。

先行研究では、各語の意味や使用された時期についての説明はされているが、詳しい説明はされていない。

2.2 謙讓語の使用について

坂本恵（1984）は、「致す」「参る」「申す」「存ず」を調査し、「致す」を中心に述べた研究である。江戸末期における町人のこれらの使用について「はなしてききてには上下関係のある場合が多（P. 15）」いこと、「町人はききてへの配慮のみで（P. 16）」使うことを述べている。「参る」は、話し手が下位者で、聞き手が上位者である場合が多いという謙讓語の特徴を有しつつ、聞き手への配慮のみで用いられるという丁寧語としても用いられていた。

3. 調査対象資料と考察方法

まず、調査対象資料についてであるが、洒落本、滑稽本、人情本を用いた。資料の詳細は、最終頁を参照されたい。

次に、考察方法についてであるが、考察は二つの観点から行なった。一つ目は、敬語的人称¹である。行為の主体が誰かという点を明らかにするためである。謙讓語の行為の主体はふつう、Ⅰ人稱（話し手側の領域の人物）であるが（謙讓語は、話し手が自分の領域の人物を低く位置付けることにより聞き手に対して敬意を示す）、Ⅲ人稱（話し手側の領域と聞き手側の領域のどちらか一方とはいえない人物）のこともある。二つめは、表わす意味領域である。〈行く〉〈来る〉〈ていく〉〈てくる〉に用例をわけることで、使用される範囲を知ることができる。この二点から、各語について考察を行なう。その際、話し手と聞き手の関係や補語は何かという点にも着目する。ただし、坂本（1984）に、「絶対謙讓語の場合、敬意の対象、配慮を払う相手は明確ではない。謙讓語と言った場合、その動作主体（ふつうははなして、はなして側のもの）を低く位置づける、という性質を考えるが、この場合も、何に対して低いかは明らかではな

¹ 菊地康人（1994・1997）による分類方法である。Ⅰ人稱は「話し手側の領域の人物」、Ⅱ人稱は「相手側の領域の人物」、Ⅲ人稱はⅠ人稱やⅡ人稱以外の純粋なⅢ人稱となる（P. 119）。

い。(P.11)」とある。本稿では、坂本(1984)を踏まえつつ、補語と話し手、聞き手との関係を考慮しながら考察を進める。

4. 近世後期江戸語における謙讓語の使用

4.1 概観

収集した用例について、敬語的人称(【表1】)と、表わす意味領域(【表2】)の二面から考える。まず、【表1】を見てみよう。

【表1】敬語的人称による分類

敬語的人称 下位分類	I人称	II人称	III人称		意味が異なる例	除外	合計
			人物	事物			
うかがう	3				19		22
あがる	28(4)					3	31
さんず	37		1	6		2	46
まいる	270(9)[17]	1[1]	45	22	4	31	373
めえる	36(2)[5]	1[1]	3	1		3	44
合計	373	2	49	29	23	39	516

*注1:「除外」とした例は、武士の使用例や口上の例、言葉づかいについて説明した例等である。注2:「参る」の読み不明の例は、「まいる」の例とした。注3:「まいる」のうち、〈寺社へ行く〉は【 】で、〈一緒に行く〉は〔 〕で内訳を示した。注4:「あがる」のうち、〈お屋敷へ行く〉は()で内訳を示した。注5:他に、「まいりす」4例、「まいりいす」4例の使用も見られた。

【表1】から、2. 1で確認したように、「うかがう」「あがる」「さんず」「まいる」の例が見られたこと、その他に「まいる」の音訛形「めえる」が見られたことがわかる²。また、謙讓語はふつう、行為の主体がI人称になるため、すべての語がI人称での使用が多いが、「さんず」と「まいる」、「めえる」は、III人称での使用も見られたことがわかる。

次に、【表2】「うかがう」「さんず」「あがる」「まいる」の表わす意味領域からわかることを挙げる。

【表2】「うかがう」「さんず」「あがる」「まいる」の表わす意味領域

表現/資料名	〈行く〉	〈来る〉	〈ていく〉	〈てくる〉	意味が異なる例	除外	合計
うかがう	2 9.1%	1 4.5%			19 86.4%		22 100%
あがる	15 48.4%	13 41.9%				3	31 100%
さんず	11 23.9%	22 47.8%	2(0) 4.3%	9(2) 19.6%		2	46 100%
まいる	151 40.5%	115 30.8%	17(0) 4.6%	55(7) 14.7%	4 1.1%	31	373 100%
めえる	17 38.6%	11 25.0%	2(0) 4.5%	11(1) 25.0%		3	44 100%
合計	196	162	21(0)	79(10)	23	39	516 100%

※「うかがう」の「意味が異なる例」には、〈聞く・尋ねる・見る〉で用いられた用例数を示した。

※〈ていく〉〈てくる〉の()内の数字は、移動の意味ではなく変化の意味で用いられた用例数を全体の内訳として示した。

【表2】から、「うかがう」と「あがる」は、〈行く〉と〈来る〉で使

² ただし、洒落本では、「さんず」と「まいる」「めえる」の使用のみ見られた。『日本国語大辞典第二版』の初出例よりも前に成立した資料(洒落本)では、「うかがう」「あがる」はまだ用いられていないことが確認できる。

用され、「さんず」と「まいる」「めえる」は、〈行く〉〈来る〉のほかに、〈ていく〉〈てくる〉で使用されたことがわかる。さらに、表中、「さんず」と「まいる」「めえる」には、() で内訳を示したように、〈変化〉の意味で用いられた例が見られた。それが以下の例3、例4である。

(例3) ヲヤ>>また雨が降ってさんじました。(腰元お民→中流男性鳥雅)【〈下→上〉の関係】[『春告鳥』412]〈Ⅲ〉³

(例4) ソシテマア、見る事聞く事が、万事古くなって、己が気で何所がおかしいかと、をつにひかへめになって参ります。(下層男性鼓八→中流男性衰微)【〈下→上〉の関係】[『浮世風呂』250]〈Ⅲ〉

例3は「さんず」の例、例4は「めえる」の例である。「さんず」の例は2例あり、2例とも『春告鳥』における〈雨が降ってきた〉で使用されている。使用は見られるものの多くはない⁴。一方、「まいる」や「めえる」は、〈雨が降ってくる〉に限らず使用される。

したがって、【表1】、【表2】から、「うかがう」と「あがる」には行為の主体がⅠ人称で使用されることと、〈行く〉〈来る〉で使用されるという共通性が、「さんず」と「まいる」にはⅠ人称以外⁵にも使用されることと、〈ていく〉〈てくる〉でも使用されるという共通性が認められる。これは、『日本国語大辞典第二版』や先行研究で確認した新旧の違い―「うかがう」と「あがる」が新しく、「さんず」と「まいる」(めえる)が古い―と一致している。では、各語を比較した場合、どのような違いがあるだろうか。以下、詳しく見ていく。

4.2 「うかがう」

「うかがう」は、〈行く〉〈来る〉と判断した例が2例、〈訪問する〉と判断した例が1例見られた⁶。使われ出した時期であるため、用例数が少ないと思われる。以下の例5は〈行く〉の例、例6は〈来る〉の例、例

³ 用例は、(話し手→聞き手)【話し手と聞き手の上下関係】[『資料名』ページ]〈敬語的人称〉と示し、対象語に下線、注目した箇所点線を付す。

⁴ もう1例も、話し手が「腰元のお民」、聞き手が「中流男性鳥雅」である。

⁵ ふつう謙譲語がⅡ人称で使用されることは考えにくいだが、次のように、〈おまえがこれから観音様のところへ行く〉と解釈できる例が見られた。〈参詣する〉の意か判断の難しい例でもあり、今回はⅡ人称とした。(例)是から観音へ参るのなら。夫ばかりは許しもしやうが。〈下略〉(父親彦兵衛→娘お絹)【〈上→下〉の関係】[『毬唄三人娘』(初編～三編)28]〈Ⅱ〉

⁶ 〈訪問する〉と考えられる例がもう1例、『七偏人』に見られたが、「漢語まじりの萩らぬことを、頻りにならべ立てたる(上巻P.34)」と説明される「大愚」という人物であったため特殊な例と考えた。なお、〈聞く〉や〈問う〉〈見る〉で用いられた例は、滑稽本、人情本ともに用例が見られた。

7は〈訪問する〉の例である⁷。

(例5) ツイ伺ひませんが頭はまたお帰りがない様子サ。(伴六→中流女性お富)【〈下→上〉の関係】『毬唄三人娘(四編五編)』53〈I〉

(例6) 摩利支天様へ朝参りと出かけたから一寸伺ひやす。(伴六→中流女性お民)『毬唄三人娘(四編五編)』53〈I〉⁸

(例7) ハテネ。(トしばらく考へ) 実は。今朝程魔利支天へ参詣を仕やしたから序ながらお民さんのお宅を伺ひやしたら何かお客様の御やうすだから門口から御暇をいたしやしたが別に御不快といふ御様子も見へませんだツたが。(伴六→主人要人)【〈下→上〉の関係】[『毬唄三人娘』四編五編 56]〈I〉

例5と例6、例7の話し手は、本文中、「爰に近来この屋しきへ。新抱なる黒山伴六。まだ年若き雄士なれど。何かの事に往わたり。殊に要人の下役なれば。(「初編～三編」P.90)」と説明がある人物である。聞き手は話し手にとって主人(例7)や主人の妻(例5)、主人の妻の妹(例6)である。いずれも話し手と聞き手の関係は〈下→上〉の関係であり、話し手にとって聞き手は、敬意を表わすべき人物である。また、補語は聞き手の関係者であることから高めるべき場所と考えられる。

4.3 「あがる」

「あがる」は、「うかがう」と同様、〈ていく〉〈てくる〉の使用が見られなかった。4. 1で述べたように、この二語は、行為の主体がI人称でしか見られないことと表わす意味領域の両方において似た傾向を示す。しかし、「あがる」の使用は、すべての階層で男女の使用が見られ、「うかがう」に比べて使用例が多い。次の例8、例9は中流以上の人々の使用例である。

(例8) 是非明後日はあがりませう。偕今日は鳥度あがつて。種々ありがたうございます。(中流女性・聞き手は話し手の客→中流女性お夏)【〈下→上〉の関係】[『毬唄三人娘』(初編～三編) 51]〈I〉

(例9) それは宜いが、お講釈がはじまつて居た御様子故、私もお聞き申さうと思つて上がつたのだから、サアお構ひなくお遣んなすつて下せへ。(中流男性源兵衛→中流男性喜次)【〈対等〉の関係】[『七偏人』上巻 84]〈I〉

話し手と聞き手の関係は、例8は〈下→上〉の関係、例9は〈対等〉

⁷ なお、例5や例6は「を格」をとらないことから、〈行く・来る〉の例とし、例7は「お宅を」と「を格」をとることから、〈訪問する〉の例とした。これらの区別の変化(あるいは変化しない)については今後の課題としたい

⁸ 小松寿雄(1971)が、辻村氏が挙げた例として紹介している。

の関係である。ただし、例9の話し手は丁寧な言葉づかいで話していることに注意したい。また、どちらの例も、聞き手である「あなたの所」を補語として想定できる。「あがる」は、丁寧な言葉遣いで話す〈対等〉の関係でも、聞き手に対して使用されていることから、「うかがう」よりも使われていたと考えられる。なお、【表1】中、()で内訳を示したが、〈お屋敷へ行く〉の例(4例)も見られた。「お屋敷」という高位の場に対して用いていると考えられる。ただし、〈お屋敷へ行く〉といっても、以下の例10のように〈お屋敷へ奉公に行く〉場合もあれば、例11のように〈用事があってお屋敷へ行く〉場合もあった。

(例10) 此子が上がりましたお屋敷さまは、お高が能所為か御富貴でございましてネ。(中流女性きぢ→中流女性いぬ)【〈対等〉の関係】[『浮世風呂』101]〈I〉

(例11) この間もお屋敷へあがりまして十二月のけいせいと鰹うりををどりましたらけしからず御ぜんさまの御意に入つて半田いなりのおこのみが出まして大あたりさ。(かしましいと言われる人→相手)【〈対等〉の関係】[『四十八癖』337]〈I〉

例10は、話し手の娘が〈お屋敷へ奉公に行く〉という場合に、例11は、話し手の女性が、屋敷奉公の口が早く見つかるように、〈長唄を披露してお屋敷へ行った〉という場合に使用している。ただし、〈用事があってお屋敷へ行く〉場合は、次の例12のように、「まいる」も用いる。

(例12) 私やアさつぱりぞんじましなんだが、此間千葉之助さまの御分知の、千葉半之丞さまといふおやしきへ、はじめて召れましたが、是までついぞ参る様な御ゑんもないが、どうして召てくださるかと存て上つて見ますと、旦那さまといふは繪岸の半さんだから、きもをつぶしまして〈下略〉。(中流男性善兵衛→花魁此糸)【〈対等〉の関係】[『春色梅児褒美』235]〈I〉

例12では、同じ発話内で、〈用事があってお屋敷へ行く〉場合に、「まいる」と「あがる」を用いている。心理的な変化や場面の変化は見られない。したがって、「あがる」は、敬語的人称と表わす意味領域においては「うかがう」と似た傾向を示すが用例は多い。また、〈行く〉や〈来る〉で使用される「まいる」とも同じように用いることができる。

4.4 「さんず」

「さんず」は、〈ていく〉〈てくる〉での使用が見られ、行為の主体はI人称やIII人称での使用が見られる点が、「うかがう」や「あがる」とは異なる(4.1)。次の例13はI人称の例である。

(例13) 旦那さんを、お坊さんをお連申て参じました。(山出し下女→

中流男性・主人福助)【〈下→上〉の関係】[『浮世風呂』278]〈I〉

例13は、〈話し手が主人の息子を主人のところへ連れて来た〉という場合に用いられている。話し手と聞き手の関係は〈下→上〉の関係である。補語は聞き手である「あなたの所へ」と考えることができる。

また、使用者を見ると、「さんず」の使用は男女ともに見られるが、男性の使用が目立った。また、年配者の使用も目立った(成人男性の母親、質兵衛(老人)、成人夫婦がお袋さんと呼ぶ女性等)。次の例14は、老人の男性が話し手の例である。行為の主体はⅢ人称で、物や名前に軽卑語「～め」を下接した人物に使用している。

(例14) その題とやらハ、御廻状ごわいじやうに添て、参じましたが、エゝ忠臣蔵と申事で、私方へ仰付られましたハ、五番目と申ことでござります故、〈中略〉その親父が、金を五十両と申すもの、おまいさん懐中いたして、通りかゝります處を、彼定九郎めが付て参じまして、年寄の夜道はあぶないから、おくつてやろうと、しんせつらしく申ますが〈下略〉。(中流男性質兵衛→中流男性左次郎)[『八笑人』220]〈Ⅲ〉

例14は、〈狂言の題が来た(=届いた)〉という場合と、〈定九郎めが付いて来た〉という場合に使用されている。この「定九郎」というのは、狂言のあらすじを説明するときに出てくる登場人物である。このように、物や関係のない人物が行為主体の場合に用いられるのは、話し手が聞き手に対して、丁寧な言葉づかいで話していることが関係しているだろう。ただし、〈行く〉〈来る〉の例の中には、「あがる」と「さんず」が、同じような場面で用いられた例が見られる。次の例15と例16を見てみよう。農民から中流男性に対して用いられている。

(例15) イエゝゝ傘は宿しゆくが近きんひから入ませんが、今日は少し御相談申したいことがあつて参じました。(農民→中流男性鳥雅)【〈下→上〉の関係】[『春告鳥』413]〈I〉

(例16) ヘイヘイナニ左様ならばまた上りませう。(農民→中流男性鳥雅)【〈下→上〉の関係】[『春告鳥』413]〈I〉

この2例は、同じ場面での発話であり、心理的な変化は見られない。同じように用いられている。したがって、「さんず」は、敬語的人称や表わす意味領域の広い点が「あがる」とは異なるが、「あがる」と同様に使用されることもあり、重なる部分がある。ただし、男性の使用や年配者の使用への偏りが見られることから、使用者という点においては狭い。

4.5 「まいる」

「まいる」は、「さんず」と同様、表わす意味領域では、〈ていく〉〈てくる〉の使用まで広い範囲で使用される。敬語的人称もⅠ人称からⅢ人

称までの広い範囲で使用される。しかし、「さんず」とは異なり、使用者には偏りが見られず、男女ともに用い、世代による偏りも見られない。以下の例17、例18は、I人称の例であるが、補語を考えたとき、敬意を表わす必要のない場所に対しても「まいる」を用いている(例18)。

(例17) 殊に私しの口から申も如何でござぬ舁が兄が御使に参るからは
まさか指をくわへて引込やうな事もいたしますまい。(中流女性お
扇→女主人お組)【〈下→上〉の関係】[『春色恋廻染分解』171]〈I〉

(例18) あなたはさう一ト口におっしゃいますが。逆も女は罪が深いから。
苦労は一生放れませぬ苦勞よりこのからだ。さきへ地獄へま
ゐりませう。(芸妓小万→中流男性金五郎)【〈下→上〉の関係】[『仮
名文章娘節用(第三編)』95]〈I〉

例17は、〈話し手の兄が主人の想い人の所へ行く〉という場合に、例18は、〈私が地獄へ行く〉という場合に用いられている。例17の補語は「あなたの想い人の所へ」を想定できるが、例18の補語は「地獄へ」となり高い敬意を表わすべき場所ではない。例18の話し手は、聞き手に対して丁寧な物言いとして「まいる」を用いたと考えることができる。

また、「まいる」「めえる」の特徴の一つとして、〈私とあなたで一緒に行きましょう〉という場合に用いられるという点が挙げられる。

(例19) わたくしもお供いたして。亀ン子は又明日見にまゐりませうね
へお坊さん。(乳母→中流男性・幼児金之介)【〈下→上〉の関係】[『仮
名文章娘節用(第三編)』125]〈I〉

坂本(1984)にも、〈一緒に〉という例が指摘されている。坂本氏の現代語の説明になるが、「もともと、ききてをはなして側にひきつけて、いっしょに主体にしてしまうのは、いわば失礼なことである。〈中略〉しかし主体には自分自身も含まれているため、尊敬語は使えない。丁寧語は主体を低くするわけではない。(P.14-15)」と説明している。このような使用は「まいる」「めえる」にしか見られなかった。

次に、III人称で用いられた例を挙げる。次の例20は「セツ坊主(=僧⁹)」が行為の主体、例21は「お好(=料理)」が行為の主体である。

(例20) ラヤ>>モウセツ坊主が参りましたネ。なるほど時雨月の中の
十日とつて日が短かいぞ。(お袖→おちせ)【〈下→上〉の関係】[『閑
情末摘花(初編～三編)』208]〈III〉

(例21) 吉兵衛さんへ、今一物のお好も参りました。(若い物喜八→中

⁹ 『日本国語大辞典第二版』に、「江戸の芝増上寺の所化寮から毎夕七つ時(午後四時)頃に、10人または20人ずつ一組になって市中に出、点灯頃まで拍子木を打ち鳴らしながら托鉢して歩いた僧の一隊。」と説明がある。

流男性吉兵衛)【〈下→上〉の関係】[『春告鳥』519]〈Ⅲ〉

例20も例21も、話し手と聞き手の関係は〈下→上〉の関係である。行為の主体が物や、話し手や聞き手に関係のない人物でも「まいる」が使用されている。話し手は聞き手に対して、何かを低めたり高めたりして敬意を表わすのではなく、丁寧な物言いをするために使用している。

最後に、【表1】中の「意味の異なる例」について説明する。これは〈物事がうまくいく〉の例が1例と、〈合点がいく〉の例が3例である。次の例22は〈合点がいく〉の例である。

(例22) それは呑こんでおりますが。なんぼお祖父さまのおたのみで。お家の為や若旦那のおためとは申しながら。常にかはってあなたの気づよさ。お思ひきりのよさといふものは。あんまり見事でござりますから。どふも合点がまゐりませぬ。(乳母→中流女性小三)【〈下→上〉の関係】[『仮名文章娘節用(後編)』163]〈意味の異なる例〉

「まいる」は、例22の〈合点がいく〉のような場合にも使用が見られる。このことから、「まいる」は、幅広い範囲で使用されたことがわかる。

4.6 「めえる」

「めえる」は、ほぼ「まいる」の使用と重なるが、その使用者は、男性の使用と下層の人々の使用に偏る。このような音訛形使用者の偏りは、他の敬語にも見られる。次の例23は中流男性のI人称の例である。

(例23) 夫も尤だがサテこの天窓じやア。翌から商賣も出来ず。どうしたら宜らうと言って。私の方へ参りましたから。見れば思へば胆が潰れ。種々理屈も申したけれど。跡の祭りに役に立ず。マア兎も角も此始末をお前様にお断申て。御了張をお借申さうと思つて参りました。(中流男性久治→万右衛門)【〈下→上〉の関係】[『閑情末摘花(四編五編)』83]〈I〉

話し手と聞き手の関係は、〈下→上〉の関係である。補語を考えると、〈自分の叔父が自分の所へ来た〉となる。補語が高める場所ではないため、聞き手を意識して「めえる」を使用したと考えられる。

次に、Ⅲ人称の使用例である。次の例24の行為の主体は「お留守衆」、例25は「吉原の情人から来た玉章(=手紙)」である。

(例24) モシ小三さんへ。このぢうのお留守衆が。夕方行から口をかけて。置てくれるといつてめへりましたよ。(若い者→中流女性小三)

【〈下→上〉の関係】[『仮名文章娘節用(後編)』129]〈Ⅲ〉

(例25) 今日へは出ます節、衣類を着換やうとぞんじたところが、彼吉原の心底方より、まへつた玉章をツイ取おとしまして、山の神に取上げされました。(中流男性安波太郎→八笑人たち)【〈対等〉の関係・

丁寧な言葉づかい】[『八笑人』127]〈Ⅲ〉

例24の話し手と聞き手の関係は〈下→上〉の関係である。例25は〈対等〉の関係であるが、丁寧な言葉づかいの際に使用している。

5. まとめ

以上、近世後期江戸語における〈行く・来る〉の謙譲語について見てきた。今まで述べたことをまとめると、次の【表3】のようになる。

【表3】まとめの表

分類 謙譲語	敬語的人称					表わす意味領域				
	Ⅰ人称		Ⅱ人称	Ⅲ人称		〈行く〉	〈来る〉	〈ていく〉	〈てくる〉	
	私・身内	〈一緒に〉	—	人	物	—	—	—	移動	変化
うかがう	▲					▲	▲			
あがる	◎		▲			○	○			
さんず	◎		▲		△	△	○	▲		△
まいる		◎	▲		△	○	○	▲		△
めえる		◎	▲		▲	○	△	▲		△

*各語における割合、50%以上が「◎」、30%以上50%未満「○」、10%以上30%未満「△」、10%以下「▲」

5.1 各語のまとめ

- ・「うかがう」は、行為の主体がⅠ人称（私・身内）の場合に使用され、〈行く〉〈来る〉でのみ用いられる（4.1）。詳しく用例を見ると、補語は高めるべき場所をとっている。話し手は聞き手に対して敬意を表わしていると考えることができる。
- ・「あがる」には、「うかがう」と共通した点が見られる。それは、行為の主体がⅠ人称（私・身内）の場合に使用が偏り、〈行く〉〈来る〉でのみ用いられる点である（4.1）。ただし、具体的な用例を見ると、「あがる」は、男女ともに用いられ、「うかがう」よりも使用例が多い。また、〈お屋敷へ奉公に行く〉場合や、〈用事があってお屋敷へ行く〉場合、単なる〈行く〉〈来る〉の場合にも使用され、使われる場面という点においても、「うかがう」よりも広い（4.3）。
- ・「さんず」は、Ⅰ人称（私・身内）で用いられることが多いが、Ⅲ人称（人・物）での使用も見られる（4.4）。表わす意味領域は、〈てくる〉の場合に〈変化〉の例も見られる（4.1）。この点において、「うかがう」や「あがる」とは異なり、「まいる」との近さを指摘できる（4.1）。詳しく見ると、使用者は男性の使用も女性の使用も見られるが、男性の使用と年配者の使用に偏りが見られる。これは、古くから用いられた表現であったことが影響していると考えられる（1）。
- ・「まいる」も「さんず」と同様、Ⅰ人称（私・身内）からⅢ人称（人・物）までの広い範囲で使用され、表わす意味領域も広い（4.1）。具体的な使用を見ても、使用者に性差や階層差は見られず、範囲が広い。

さらに、〈一緒に行く〉や〈合点がいく〉のような例も見られ、他の語に比べて使用範囲が広いといえる(4.5)。

- ・「めえる」は、「まいる」の使用とほぼ重なる。音訛形の使用者に共通することであるが、男性の使用と下層の人々の使用に偏る(4.6)。

5.2 「うかがう」「あがる」が使用されるようになった要因の一つ

5.1でまとめたように、近世後期江戸語では、江戸期以前から用いられた「さんず」や「まいる」が、敬語的人称と表わす意味領域の両面において、広い範囲で用いられていた。現代語の謙讓語Ⅱ(丁重語)に近い使われ方といえる。一方、「うかがう」と「あがる」は、話し手が高く位置づけようとしているのではないかと想定できる補語をとって用いられていた。これは現代語の謙讓語Ⅰに近い。ただし、4節で述べたように、「あがる」と「まいる」や、「あがる」と「さんず」は同じような場面で使用されることがあり、現代語の分類のように明確にわけるとは難しい。しかし、〈下→上〉の関係、または、丁寧な言葉づかいで会話をする〈対等〉の関係で、かつ、高く待遇したい補語を意識した場合、「まいる」や「さんず」のような広い範囲で使用される表現では物足りなくなっていたのではないかと考えることができる。そこを埋める表現として「うかがう」や「あがる」が用いられ始めたのではないかと、使用されるようになった要因の一つとして考えることができる。

6. 今後の課題

本稿では、近世後期江戸語における〈行く・来る〉の謙讓語の使用について、敬語的人称と表わす意味領域という面から述べてきた。今後は、明治期東京語との違いやつながりについて考える必要がある¹⁰。

○参考文献

- ・ 『江戸時代語辞典』2008、角川学芸出版
- ・ 『日本国語大辞典第二版』2001、小学館
- ・ 菊地康人(1994・1997)『敬語』角川書店
- ・ 小林賢次(2010)「「お宅に伺います」と「お宅に参ります」—謙讓語と丁重語の区別」『国語教室』92
- ・ 小松寿雄(1971)「近代語Ⅱ」『講座国語史 5 敬語史』大修館
- ・ 坂本恵(1984)「現代丁重語の性質—「致す」を中心にして—」『国語学 研究と資料』7

¹⁰ 用例を収集し分析しているところではあるが、「うかがう」の用例数の増加と「さんず」の用例数の減少(消滅)の傾向が認められる。本稿で指摘した近世後期江戸語における「うかがう」が使用されるようになることや、「さんず」に年配者の使用への偏りが見られること等と矛盾しないと考えている。

- 坂本恵 (1986) 「丁重語の周辺—「おる」について—」『国語学 研究と資料』8
- 田中章夫 (1960) 「江戸時代の敬語」『国文学-解釈と教材の研究』5-2
- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』東京堂
- 辻村敏樹 (1992) 『敬語論考』明治書院
- 湯沢幸吉郎 (1954、1957) 『江戸言葉の研究』明治書院

○調査対象資料

『遊子方言』田舎老人多田翁 (1770) (『新編日本古典文学全集』)、『甲駟新話』大田南畝 (1775) (『新編日本古典文学全集』)、『浮世の四時』南陀伽紫蘭 (1784) (『洒落本大成』)、『甲驛妓談角鶏卵』月亭可笑 (1784) (『洒落本大成』)、『古契三娼』山東京伝 (1787) (『新編日本古典文学全集』)、『一目土堤』内新好 (1788) (『洒落本大成』)、『傾城買四十八手』山東京伝 (1790) (『新編日本古典文学全集』)、『商品傀儡』青梅舎主人 (1792) (『洒落本大成』)、『傾城買二筋道』梅暮里谷峨 (1798) (『新編日本古典文学全集』)、『繁千話』山東京伝 (1798) (『新編日本古典文学全集』)、『大通契語』笹浦鈴成 (1800) (『洒落本大成』)、『商内神』十返舎一九 (1802) (『洒落本大成』)、『譚話浮世風呂』式亭三馬 (1809) (『新日本古典文学大系』)、『柳髪新話浮世床』式亭三馬 (1812) (『新編日本古典文学全集』)、『四十八癖』式亭三馬 (1812) (『新潮日本古典集成』)、『花暦八笑人』瀧亭鯉丈 (1820) (岩波文庫)、『妙竹林話七偏人』梅亭金鷲 (1857) (講談社文庫)、『仮名文章娘節用』曲山人 (1831) ((前編) 鶴見人情本読書会 (1998) 『鶴見日本文学』2、(後編) 鶴見人情本読書会 (1999) 『鶴見日本文学』3、(第三編) 鶴見人情本読書会 (2000) 『鶴見日本文学』4)、『春色梅児誉美』為永春水 (1832) (『日本古典文学大系』)、『春告鳥』(1836) 為永春水 (『新編日本古典文学全集』)、『閑情末摘花』松亭金水 (1839) (浅川哲也 (2015) 『新國學復刊』7 (初編～三編)、浅川哲也 (2016) 『人文学報』512-7、首都大学東京都市教養学部人文・社会系 首都大学東京人文科学研究科) (四・五編)、『春色恋廻染分解』山々亭有人 (1860) (浅川哲也 (2012) 『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』(おうふう))、『毬唄三人娘』(初編～三編) 松亭金水 (1862) (浅川哲也 (2011) 『人文学報』443 (首都大学東京) (初編～三編) 山々亭有人 (1862)、浅川哲也 (2012) 『人文学報』458 (首都大学東京) (四編・五編))、『春色江戸紫』(初編～三編) 山々亭有人 (1864) (浅川哲也 (2013) 『人文学報』473)、

*本研究は、若手研究(B)課題番号 17K13466 「近世後期江戸語から明治期東京語における第三者用法の体系的研究」の一部です。本稿は早稲田大学日本語学会前期研究発表会 (2018年7月14日) の発表内容に修正を加えたものです。多くの先生から貴重なご教示を賜りましたことを心より感謝申し上げます。

—やまだ りな (東京福祉大学特任講師) —

